

奇襲隊の計畫中止に就て

飯田中將

この問題に私は直接關係して居りませんで秋山參謀から種々のお話があり斯う云ふことがあることは承知して居りました。或はこれは佐藤中將が御承知かも知れませんが、大体それは參謀長室で秋山中佐參謀、それから淺間艦長と云ふ所でお話が進んでをり能くは存じませんが殆んどもう決つて居つたものが、第二艦隊の方で淺間を一艘抜かれると云ふことが非常に不利だと云ふことで、その場合になつてお止めになつたやうに承知して居ります。

佐藤中將

(木田稿)

初の計畫は奇襲隊を先に立て第二戦隊を之に續かしめて勝致してそれで行くと云ふことであつたのであります。

委しいことは知らぬが當時藤井参謀長から聞いた所では渡間に驅逐隊を附けて何か奇襲をやるのだと云ふことで第二戦隊より渡間を抜くと云ふことは残念ながら之を認めるとしても第二戦隊は何處迄も本隊に在て戦はなければいかぬと云ふことを聯合艦隊司令部へ申込んだと云ふことであります。

中島少将

それは藤井参謀長から、加藤聯合艦隊参謀^長へ申込んだと云ふことが藤井大將談として大學校の記録に残つて居ります。

(本田 穂)

0417

それに依りますと、大体の要旨は今の佐藤閣下の仰つたやうに二つの問題がある、一つは戦闘艦隊が先に行かずに装甲巡洋艦隊たる第二艦隊が先きに立つと云ふことであり、今一つは奇襲計畫であつた。然るに数日前藤井少謀長の意見に依り第二艦隊を先きに立てることは取止めとなつたばかりなるに今又奇襲計畫をも取消すことは具合が悪いから當日に就つて状況により中止と云ふことにするからとの約束で戦果その物はいじらぬと云ふことになつたとあります。

案

觸接部隊の行動

財部大將

今度は一觸接部隊の行動上教訓たるべき事項（附スウオロフ撃沈に就いて）百武大將に御願します

觸接部隊ノ行動上教訓タルべき事項（百武大將手記）

一日本海海戦ノ初期ニ於ケル露國艦隊ノ行動ガ餘リニ無爲ナリシタメ我觸接部隊ノ行動ハ殆ンド彼ノ爲メニ妨害セラルルコトナカリシヲ以テ實ハ格別教訓トナルべき深刻ナル經驗ヲ體得シ得ナカッタノデアリマス從テ特別ニ申スべき程ノコトデモアリマセンガ御註文デアリマスカラ當時苦心シタリ又心ニ浮レドコトヲ二三申上ゲマス

本田 招

海軍 49

0419

一、武力薄弱殊ニ速力遲鈍ノ第五戰隊トシテハ敵發見後之レト完全ナル
觸接ヲ保持シ敵情報告ノ任務ヲ全フスルコトハ甚ダ困難ナル仕事ニ
テ其缺陷ヲ補フニハ

第一、最モ急速ニ出動シ敵艦隊ノ前程ニ位置スルコト

第二、水雷艇隊全部ヲ隨伴シ我兵力ノ數陷ヲ補フコト

敵ノ前程ニ位置スレバ敵ノ運動ヲ監視スルニ便ナルハ勿論速力遲鈍
ナル我戰隊ハ假令漸次彼レニ後ルル姿勢ニ變化スルト雖モ尙ホ或ル
時間ハ好適ノ位置ヲ占ムルコトヲ得ベク又敵ノ反擊ニ對シ後方ニ位
置スルヨリモ非常ニ有利デアルカラデアリマス

水雷艇隊ノ隨伴ハ當時波浪高ク非常ニ困難ニシテ艇ノ動搖甚ダシキ

後哨等
セルコトヲ
七人トシ

タメ發射管内ノ魚雷進出ノ虞アル等ノ點ヨリ尾所灣口ニ於テ一時強
留セシメンカトノ議アリシモ兵力補缺ニ重大關心ヲ有スルトヨロカ
ラ且ハ又魚雷襲撃ヲ成功スルヲモハ艇隊ヲシテ充分ニ能ク敵艦隊
ヲ自撃シ彼我ノ戰況ヲ知悉セシメ置クコト絕對ニ必要ナルヲ信ジタ
ルニ無理ニ速レ行カレタル次第ナルカ之レハ充分敵ノ脅威トナリ我
艦隊ヲシテ觸接ヲ完フスルニ與ツテ力アリシモオト確信スルトヨロ
デアリマス

此ノ意味ニ於テ第六戰隊ヲ最初ハ合同シテ運動セシメ敵ノ無慮ナル
ヲ見テ分離行動ニ移ツル機算ノ次第デアリマス
水雷艇隊ニ右同様一時避退セシメタリ

(木田 純)

海軍

0421

主隊ノ
位置ヲ知
ラザリシハ
誤ニ不安
ナリキ

一 觸接部隊艦船多數アル場合ニ主隊ヘノ通報ハ適當ノ時機ニ至ラバ其
 點位最モ有利ナル部隊ニ譲リ他ハ特別ニ注意ヲ要スルカ通報ノ誤
 ヲ發見セル時ノ外ハ沈黙スルヲ可トス當時此點ハ誠ニ善ク實行セテ
 レタリ之レ各部隊指揮官ノ常識ト軍事眼ノ便レタルニ歸スベキデア
 ルト思フノデアリマス

但シ各觸接部隊艦船ハ何時已レガ代ツテ通報ノ任ニ當ラザル可ラザ
 ルコトアルベキヲ考ヘ寸刻モ敵情監視ヲ怠ルガ如キコトヲ要ス

一 敵艦隊ヲ觸接監視シテ我主力部隊ヲ有利ナル位置ニ至ラシムルニハ
 觸接部隊ノ測定位置最モ精確ナルヲ要ス好敵ノ地物アル場合ニハ其
 著名ノ地物ヨリノ方位距離ヲ以テ敵ノ位置ヲ示ス方兵要圖ニ依ル

(木田植)

海軍

0422

リモ精細細デアリ又受信者ヲシテ一層信賴ノ念ヲ呼起スノ利アリト
思フ

二 兩接部隊ハ必要以上ニ敵ニ接近セザルヲ可トス

是レ過度ニ接近スレバ敵艦隊ノ行動ヲ一時動搖セシムルガ如キコト
モ起ルベク爲メニ却テ自ラ判断ヲ亂ルノ因ヲ爲スニ至ルコトアリ
又或ハ敵ノ反響部隊ノ攻撃ニ依リ不規ノ運動ヲ執ルノ已ムナキニ至
リ爲メニ自己ノ測定位置不正確ヲ來タシ却テ不利ヲ招クニ至ルベキ
ヲ以テチアル

(終)

高橋院殿
ヲ瑞琳佐渡
丸ニ処理セシ
メシモ此ノ
主意ニ同解
アリ。

「スウオロフ」撃沈ニ就テ

「スウオロフ」撃沈ニ就テ私ガ一言敢シテ當時ノ實状ヲ明カニシテ置キタイノハ外デモアリマセン元來吾々軍人ガ戰場ニ於テ敗退スル敵ヲ處置スルニ當リ如何ナル覺悟ヲ以テスベキヤト云フコトハ非常ニ重大ナル問題デアリマシタ其行動ノ進否ハ勝敗ノ因トナリ又士氣ノ盛衰ヲ招来スルノデアリマスカラ此點ハ我將卒上下ヲ通シテ徹底セル信念ヲ有スルノ必要アルコトヲ痛感スルカラデアリマス吾人ハ少年時代ヨリ美談トシテ或ハ「武士ノ情」トカ或ハ「敵ノ武者振リ」ニ讚嘆ノ餘リ之ヲ見落カシタルトカ色々ノ皆誤リヲ聞カサレ我傳統ノ武士的情操ニ養育シタル關係上勸メストバ敗敵ニ對シテ過度ニ同情的トナリ感傷的トナル

(本田 精)

海軍

(木田稿)

傾向ガアリマス故ニ吾々ハ常ニ其弊ニ陥ラサル如ク注意スベク「全局ノ戦斷全ク終末ヲ告グルマデハ敵ニ恩恵ヲ垂ルルノ暇ナシ」ト云フ「モットー」ノ下ニ眞ニ全軍ノ力ヲ盡シテ最後マデ奮闘シ以テ十二分ノ戦果ヲ收ムルノ覚悟ナカル可ラズト確信思フノデアリマス

當時「スウオロフ」ハ「マスト」側レ全艦火ヲ以テ敵ハレ慘^炎廉タル状況ノ下ニ尙ホ一小口徑砲ヨリ我ニ向ツテ抗戦スル様ハ實ニ敵ナガラアツバレノ武者振リデアリマシキ

片岡第三艦隊司令長官ハ何トカ之ヲ處理ヲナスベキ立場ニ出會セラレタノデアリマス時ニ午後七時頃ナリシカ第五艦隊ノ二番艦鎮遠艦長今井兼昌大佐ヨリ信號ヲ以テ回艦ノ捕獲ヲ命セラレシコトヲ乞ハルルト

海軍

0425

コロアリシモ左ノ理由ニ依リ

一 戦闘ノ経過少シモ分ラズ從テ勝敗ノ如何サヘ氣遣ハレタル狀況ニテ
新手ノ敵ヲ求ムルノ要アリ戦闘力ナキモノニ永ク係ハルノ時ニアラ
ザリシコト（又此場合鐵道一隻ヲ殘スハ向後ノ黨メ忍ビサリシ）
一 旅順封鎖戰ニ於ケル我魚雷戰ノ效果ハ遺憾ナガラ不満足ノ至リナリ
シ之レ一ハ敵將「マカロフ」ノ創意ヨリ來リシ甲種水雷ノ余弊ニ因
ルノ感アリ即チ今此敵艦ヲ標的^的トシ肉迫雷艇ノ效果ヲ全水雷艇隊ノ
將士^士ニ目撃セシムルハ率ヨ當夜ノ敵艦隊襲撃ヲシテ非常ニ效果的ナラ
シムベシトノ着想ヨリ富士本梅次郎少佐ノ第十一艇隊ヲシテ雷艇セ
シメラル

（木田精）

海軍

●●

0426

第十一艇隊ハ直ニ進ンテ距離約五百米突ヨリ逐次發射ヲナス第一發ハ見準中央舷側ニ命中水柱ヲ奔騰ト共ニ艦体ハ急ニ大傾斜ヲナシ續イテ全夕顛覆シテ赤腹ヲ上ニシ首部ヨリ急速ニ沈没ス時ニ午後七時二十五分ナリ

微

翌二十八日午前五時第五戰隊ガ鬱陵島ノ南緯西約九十哩ニ於テ「本隊」ガドブ」部隊ヲ發見シタルハ前配ノ覺悟ヲ忠實ニ遂行セルニ對スル天ノ賞與トシテ當時私共ハ満足シ感謝シタルトコロデアリマス
 右ノ如キ吾々ノ信念ニ反シテ敵ノ驅逐艦ガ戰鬪ヲ余所ニシテ味方人命ノ救助ニ専心セシメタル如キハ實ニ沙汰ノ限リナリ吾々ハ戰勝ニ向テ奮闘スル場合ニハ時ニ味方ノ危急ヲモ放置シテ顧ミザルノ堅キ覺悟

0427

アルヲ要スルト想フノデアリマス

(木田納)

海
軍
58

0428

財部大將 「笠置」の行狀（みか）に就きまして山屋大將のお話を願ひます。
山屋大將 だんだん事柄が細かくなりました、長い時間を費しては甚
だ悉縮ですから、私少し書いて來ましたから、それを朗讀致したいと
思ひます。その方が時間が半分位で済むだらうと思ひます。先程百武
大將から、お考へが適當であつたが爲に、翌五月二十八日速力の遅い
兵力の微弱なる第五戦隊が、この間に先立つてネボカトフ艦隊を見付
けて、非常に幸運であつたと云ふやうなお話でしたが、その
後を引受けまして、私は考へ違ひをして居つた爲に甚だ天祐に恵まれ
ず、^{ブチャ}賊に不様なことを致した、そのお話を對照的に一つ申上げて見
ます。先づ機關部浸水のこと（以下朗讀）に就て申上げます

0429

日本海戦前後に於ける笠置の行動

山 屋 大 將 手 記

(木田 稿)

海

軍
●●

0430

笠置の行動

機 艦 部 浸 水

五月二十七日午後三時頃第三戦隊は、左舷艦首に難然たる隊形をなしつつある敵の巡洋艦及び特務艦に對して、砲撃を繼續しつゝありたる際、敵の旗艦スオロフが黒烟に包まれながら、隊を離れて南下し來り（後に至り我他弾同艦の司令塔に命中し舵機故障を起したる爲めと承知した）頻りに笠置に向つて十五珊砲で砲撃を開始した。多くは近弾であつたが、其内異様の音がして左舷フォクスマルの舷側から薄き白煙が立登るを認めたので、一發進入つたなと感じ、艦橋の左端に出て見たが、果して敵弾

(本田稿)

穿入の孔を認めたのであつた。續く敵弾シヨートで、是等が落角の跳向
きなりし關係からであらう、何れも小魚雷となつて笠置に向ひ筋を引き
ながら水中を突進するのを約十發許り認めたのである。是等が水線下に
命中しては誠に厄介千萬の次第と不安を感じたのであつたが、幸に何等
の異状を感知せず、スオロフの砲撃も須臾^申にして中絶したのである。

四時頃と記憶するが、後艦室受持の機大尉堀川熊雄艦橋に乗り、艦室兩
側の石炭庫に浸水し隔壁の隅々より艦室内に漏水す、各ポンプ炭粉に閉
塞されて排水意の如くならず、除々増水すとの報告であつたから、破孔
は何處か、先以て之を探し當て、排水に關しては最善を盡すべく、尙ほ
變つた様子を認めたらば早速報告すべき旨を命じた。

(木田稿)

0432

此時分は戦未だ酣にして逆も見届の爲め機銃室へ降りるべき餘裕もなく、其儘忘るるともなく時を過ぎし、五時前後と思はるる頃に至り今度は機銃長金田小太郎自身艦橋に昇り来るのを見たのである。扱ては愈々難儀なことになつたかと直感し、報告は簡単に聽き、打方中止で稍小廉を得つつありし時として、司令官に暫時艦橋を離るゝことの許可を受け機銃長と同道で機銃室に降りたのである。

機銃室ではクランクピットに浸水し、クランクは水中に廻轉して飛沫を四方に飛ばし、部員は濡鼠となりて作業しつつあつた。併し一先づ安心したるは機銃室と機銃室の間のドアが開け放しであることであつて、機銃室の浸水も左程にあらずとの概念を得たことであつた。勿論兩者のフ

(木田也)

0433

(木田徳)

ツトは可なり高低の差があるので浸水は未だ此差を凌凌ひて機械室に流入するに至らなかつたのである。

機室に入つて先づ眼に附いたのは、石炭庫の内壁が膨れ出し、汽機側の面と此内壁との間に無数の支柱を當當がつて壁の破裂を防ぎあること、壁面の小孔に木栓を打込み射出し来る水を塞止しあることであつた。尚ほ手が廻り兼ねたか三四の小孔より小指大の水柱がボイラーに向つて壁面に噴出しつゝあるのを見た。浸水は此時將にフアイヤスネに達せんとしつゝありし様配様配する。

機室部の記録に由れば、五時半中央フアイヤスネに水が附き、火をかき出し、フアイヤスバルブを開き、フアイヤスを廻りて海水を冷却し、萬一の

0434

變に備へたと云ふことである。無論此時分は減速して十四海里で行動して居つたのである。

旗 艦 變 更

機關長の見込では、排水完全なれば、今のところ別に危険なし、唯炭粉の排除功を奏して排水を始むれば、直ちに再び閉塞し、次から次々と炭粉の炭庫より流出し來るが爲め殆んど際限なく、彈孔を塞ぎ浸水の源を阻止するに非ざれば、此儘長く運轉繼續と云ふことは請合はれぬのとことであつた。艦橋に戻りて出羽司令官に此狀況を報告したるところ、司令官は直ちに旗艦變更に決意され、千歳に此旨を信號されんとしたので

(木田勲)

0435

あつたが、當日の波浪の状況では、驅逐艦か水雷艇の助を借りるのでなくしては、端舟の轉覆必至の状況であつたので、艦長の立場として幹部諸氏を安全に千歳に送る確信なき限り之には不賛成の旨を述べた。司令官は然らば沖の島の風下に行き、千歳に移乗し笠置は其備假泊して應急修理をしては如何と申出でられた。由つて早速沖島附近の海底を海圖の上で調べたところ、島の周圍盡くロックである。茲でお話ししなければならぬのは、笠置の右舷錨は尾崎灣に遺棄しあつて、左舷錨一挺のみが命の~~船~~と云ふことである。それは笠置の揚錨機は不都合極まるもので、ジヨイニングシヤツクルは揚錨機のスプロケットホイールの齒に合致せず従て一節々毎にストツパーを懸けて一端を揚錨機のドラムに巻き、此

0436

ジョイエングシヤツクルを替はす必要あり、二十六日出港の時立錨となつて錨を起すに一段の張力を要する際、恰も第二節目に此仕懸けをしたところ、ストツパリの懸け方不十分なりしか否か、錨鎖二節の重みと相合してストツパーが滑り、ストツパーと揚錨機の間のみが急出して所謂ライブロードとなつて激張した爲め此の第二節第三節の間のジョイエングシヤツクルが開いて、ケーブル切断と云ふことになつたのである。急を要する出港なので、港務部に引揚方を依頼して其儘出港したのであるが、戦闘中も唯一の左舷錨まで敵弾に凌はれはせぬかと、多少懸念して居つたのである。斯る次第ゆへ切角の一錨を岩礁中に投じて又々遺棄の止を得ざるに至らば、全くのばろきとなり、艦の保案上不安を感じ

(本田樹)

ものであり、且つは戦勢の推移不明の爲め、夜中我艦運糧水雷艇の爲めに誤認され味方打を演ずる様のことありては申御なく、其上浸水増加の趨勢を防く爲めには、砂濱に乗り揚げて一時を^凌ぐ外手段なき次第なれば、前述司令官の御相談には直ちにお断するに躊躇したのであつた。

海面を瞥見するに最近の避難所としては油谷灣であり沖の島遠展るに比べて少し遠い筈はあるが、一時間餘の航程なれば一寸の我慢で、其他のデーターは完全に希望を満し得るので、灣内砂泥の上に一時擱座して應急の法を講じたとき旨を申述べたのである。

司令官は直ちに承認され、千歳を伴ひ十二海里にて八時三十分油谷灣に入港^後着艦した。此一時間餘の艦員必死の努力を以て浸水の汲出作業に

從事し、水と共に石炭を各種のバケツにて上甲板に手繰り上げ、中部上甲板は濡れた石炭の山をましたのである。

新しくして粉炭は漸く^汲汲み盡された結果、入港前ポンプ故障なく作動を始め、機関部より^以分にては浸入と排出の水量殆ど平均まで測り附けたれば、揚座は暫く見合して貰ひたしとの報告あり、則ち最初の計畫實行不事となり、手数が省けて仕合せしたのである。

援司令部では早速大本營への戦況報告作製及び之を電報用紙に書直す爲めに相當の時間を要し、旗艦變更は十時近くとなつた。此間水線下の彈孔を捜索したのであるが、どうしても分らぬ、スオープを下げて吸込されるところが孔だと、最初は容易く考へて居つたのであるが、孔は水線

下十呎の深きにあつたので、此方法は書餅に属し、ダイバーを入れたが不愼の爲めか是又早速には要領を得ず、私は身体縮の如く疲れ疲水も一時間三呎のレベルを以て、被水するとの報告に接し正子を過ぐる積少時の休息を取るべく副長に被水を托し、破孔を探し當てたらば報告を頼みヌメヤケミンの腹に背懸り、足を投げ出してホットしたが、眼瞭忽ち重く何時とはなしに熱暈の状態に陥つた。尤も旋轉んではあるよないと考へたから、ホンの一瞬の假眠を取る積で此姿勢を取つたのである。却て何かの動機でフト腹が覺めた、眩暈からは背空が見へ夜が全く明けて居ることを知つて愕然としたのである。

直ちに副長を呼んで破孔はどうか、何故に起しては呉れざりしかを詢問

したるところ、午前一時前に漸く孔を見附たゆへ早速報告に馳附たが、
壁に寄懸られた儘非常に飽く熟睡され、一二度呼んで見たが目を覺され
ず、数日來の睡眠不足と疲勞の程を察し、同情禁じ難く、殊に應急貯水
機具製作を機關部に命じたれば、其完成迄は別段命を仰ぐ必要事もな
るべしと心得、其儘お寢かし申して置いたとのことであつた。有難くも
あり怨めしくもあり、三十分もまどろめば元氣恢復する積りなのに、何
ぞ今迄摩かして置いたのかと口先迄は出たが、自分の睡りこけたのが不
覚で、其上副長の人情味が言外に溢れて居るので、つい飲込んで仕舞つ
たのである。

茲で兵隊の言として主將は、智力意力体力の三者を具備せざれば、其重

(本田納)

實を全ふし難しとの定義を思ひ出さざるを得なかつたのであります。

哨 戒 勤 務

尾崎灣待機中五月二十三日三笠より第三戦隊に哨戒出動の命令があつた。第四驅逐隊司令鈴木中佐より此機會を利用して例の乙種機雷の攻撃實習を司令部に申込んで承諾を得られたので、此夜は一つ巧みに外づして鈴木氏の鼻をあかさんものと考え、夜に入るや今か今かと待構へたが中々攻撃し來らず、正子を通ぎても一時二時になつても姿を見せず、三時四時の間と記憶するが漸く來襲して演習を終つた。翌夜再度攻撃實習を積んで充分腑に落ちる迄徹底的に遣りたき司令の申出あり、哨戒の外に二十四日夜も再び標的のお役目を勤めたのである。此夜も攻撃甚だ慎重にて

(木田地)

0442

前夜と同様明け方近く、受身には頗る難儀であるが、併し司令の眞面目なる行動には敬意を盡すに吝ではなかつた。二十五日夜哨戒中例の襲撃で終夜最も警戒を緩にする必要よりは又殆ど睡眠の餘裕を得ず二十六日朝哨戒を終つて尾崎灣に投錨し直ちに石炭の補充を行ふたのであるが、全艦員の眞黒になつて働くのに、艦長許り査閲も甚だ心無き業と、役に立たぬが作業服で上甲板に頑張り、四時頃終了して甲板洗ひ方となつたから、茲で顔を洗つて食事は後、先づ一睡と洗濯中三笠より第三戦艦直ちに哨戒出動の電命が来た、しまつた無用の遠慮であつた、一睡りもうけて置くのであつたと後悔したが、後の祭り、其儘揚錨に懸り前進の通り捨錨のイキサツの後出動、信濃丸の敵艦発見の無電待受となつたの

(木田 穂)

である。

状況判断

浸水防止の機具今にも出来上る様の報告なりしが、申々に時がかゝり、其間噴筒愈々有効に作動の結果、浸水殆ど排出し了らんとし、破孔直上の防禦甲板にあるメンホールを開くも危険なきに至りたるを以て午前九時頃之を開き、内側より便所に當て物をなし大に浸水の量を減じ得たのである。機具完成し潜水夫に依つて外部より其端を挿入しドグスターを利用して締め付け修理完了したるは午前十一時であります。

此間戦勢如何に推移しつゝあるか、敵四佐隊へ無線問合せをなしたるに、「今朝竹敷の北東方に砲聲を聞く」と云ふのと、後に「竹邊灣附近に砲

(末田稿)

聲を聞く」(時間記憶なし)と云ふ情報を得ただけで、大勢全く不明であつた。

前夜司令部に於て戦況報告調製の時、私も参加して報告の大体を承知し且つ自分の見たる處をも述べたのであつたが、スモオロフの猛火に包まれ其運命も長からぬことは想像し得たが、オスタビヤの沈没は之を見ることが出来ず、他の主力艦の撃沈などは、無論知るに由なく、夜間露艦隊の成績如何が此戦闘の成果を左右するものと判断して居つたのであります。

前年八月十日の海戦より推論して、近代的駆逐艦は砲撃に使つて容易に撃沈し得るものでない、又遠洋艦も駆逐艦の庇護ある限り、是れて左舷に

(木田稿)

0445

左様に手輕に片附け得るものでないとは此時分迄私の頭腦を支配して居つた主張であつた。尙ほ魚雷の效果に就ては全く^疑無疑を抱いて居つたのであります、六月二十三日八月十日兩夜の旅順口に於ける我夜襲部隊の攻撃は翌黎明迄斷なく續き發射魚雷の数は統計はハッキリ知りませぬが、數百個の數に達したのであるが、其効果たる當時誠に果然たらざるを得なかつたのであります。要するに連日連夜の行動が魚雷調整上變因を起し所期の進路を收らざるに原因するところ多きものと信じて居つたのである。日本海々戰當日の波濤は小艦艇には可なりの難航であつて、魚雷の精度を害すること妙なからずと想像した、従て夜襲の效果に就て多くを望むべからずと些か消極的の觀察をして居つたのであります。

(木田純)

是等の判断より我艦隊が實際に擧げ得た^る戦績の如きは到底思ひ及ばざりしところであつて、鎮海湾五ヶ月の射撃訓練は確かに其結果を齎らすべきは豫測して居つたが、夫にしても敵の若干は浦鹽に竄入し、ロシヤ、グロモボイなど、合して一勢力を形づくり、之を從來通り無關心に放棄するは所謂虎を野に放つが如く、なんとしても同港口附近に有力なる艦隊を必要とするであらう、然るときは此役目に當るのは遂當り第三艦隊であらねばならぬと考へて居つた。此概念が私の頭を支配して居つた結果、間に合せの仕事で直ぐ又風呂番れるよりは、如何なるところでも其儘長く御用に立つといふ方針が、此際適切と判断して浸水防護機具の出来上るを待つたのであります。

(木田徳)

一時間平均三時のレベルで減水することの確實となつたのは、機関部の記録に用れば午後十時半であり、私の之を承知したのは正子近くであつたと記憶する。そこで安心して一休みしてツイ眠りこけたのであるが、當時若し實際の戦績の如く、此一戦で敵艦隊全滅と想像して居つたならば、減水の程度ハツキリすると同時に、破孔が何處にあらうと、其大小は如何あらうと、後部の四艦は石炭を扱へば又々噴筒が物を云はぬことになるので使用は出来ぬが、他の八艦で僅に十二週は出るものであるから二十七日五の正子には出港して、既定集結點に向つたであらうと思ふ。従て情況判断を誤り二十八日北進につれ艦隊間に交信の無電漸次明瞭となり、意外の大捷敵艦隊全滅の概念を得、固もなく全隊佐世保通航の聯

合戦隊無敵命令を受領したときは、絶大の喜びと無敵の嬉みとが交互に私の胸懐を往來したのであつて、これは私の詐らざる告白であります。

破 孔

破孔は艦の中部水線下十呎サイドプレート^ろと接合部の直上にありまして、彈頭下方に成る角度を爲し此接ぎ目の爲めに支へられて滑走を止め、穿入の力のみ働いてプレートに破孔を穿ちたるもの、如く、孔径四半^半に満たず、彈丸は其儘ボロりと沈下したもので、此接ぎ目がなければプレートに^凹凹形を凹したるのみで其儘無難に逃れ得たかも知れぬ。其證據には入渠後同舷側舷部に痕なぐりに可成り大なる彈丸の衝突したる凹部を見たのであります。入渠中彈孔を覗きに各種の人が渠岸に遣て来て、遠方

0449

から見るから殊に小さな孔に見へるので、詰らなそうな顔をして歸つて行くのを見て、苦笑と共にモット孔が大きければよかつたなどと倒さまなことを考へたこともあつた。同僚なぞ多くは氣兼ねたのであろう、此災難に就て質問を發した人が一向なかつた、こちらから進んで話をするのは、言辭の様に思はれて心苦しき次第なれば、此三十年間一切無言で通したのであるが、今回史蹟會を機として、事僅かに一纏に係り餘り將來の参考にもならぬ儘の細事ながら、事柄を明かになし置くが後世戦史研究家の爲めに無用の業にあらずと信じて、貴重時間を割愛して書いたのであります。

(木田稿)

海

軍

80

0450

音羽の行動

有馬大將

日本海海戦の末期に近く第三燈隊司令官より笠置が敵陣の露め損害を
蒙り千歳を率ゐて油谷灣に行く^二つゝ音羽は新高を率ゐて油谷灣に行くに
音羽は新高を率ゐて瓜生司令官の指揮を受くべきの訓令を受けた。
自分は第三艦隊の是れ迄の行動を見戦國艦隊常に大に失し十分砲火の威力
を發揮し得なかつたことを甚だ遺憾としてゐた。然るに瓜生艦隊は戦國
將に堪なる噸敵に近迫して勇敢に交戦します。自分は遠方から此の情況
を窺見して瓜生司令官の行動に深く感心して層々羨望であつた。それ故
瓜生司令官の麾下に入るべき命令を受けて勇躍したのであつた。五月二

十七日の夜は警戒大に努めたが別段變つたこともなく翌二十八日早朝と
なつた。此のとき四方遙かに煤煙を見瓜生司令官の命に依り香瀬新高を
率ゐて之に向つた。段々近づいて見るとそれは艦艇スエトラーナである。
速力は餘り出て居らぬやうだが然し却々近づかない。愈一萬米に入つた
とき彼から砲火を閉ゑいた。こちらは暫く我慢してゐたが向ふが頗りに
打つので應戦した。暫し砲戦をしたが容易に命中しない。その内に香瀬
の一弾命中し其の爲めか敵速艇に波じ漸次接近するにつれ我方の射撃は^弾
よく命中し敵艇は非常なる火災を起した。其の時敵には駆逐艦が一隻隨
伴してゐたので丁度居合せた我駆逐艦(艦長南星 一)に敵駆逐艦の攻撃を命
じた。南星駆逐艦長は敵駆逐艦を追撃しつゝ、視界外に去つたのであつた

が其の内にスエトラーナは非常な火災を起し最早大丈夫だと見込がついたので南星の其の後の消息も分らないし旁々新高をして敵艦逐艦を追はしめ普羽はスエトラーナの止めを刺したのであつた。敵艦が非常な火災を起し段々傾いて來たとき後進をかけたので普羽は非常に敵に接近し小口徑砲を打たせてやつたが敵が後進をかけたのを見た人は敵が魚雷を發射するのではないかと心^配し餘り近寄つてはいけませんと云ふたが併しこれ丈け傾斜してゐるから大丈夫だ。魚雷を打つ筈がないと云つて尙も砲撃を續けてゐる内に銃聲立になつて沈没した。敵艦が沈没間際に後進をかけたのは乗員が海に飛込んで逃れやうとするときスタールに機を込まれない爲め先づ艦の前進力を止め皆前甲板から飛込んだ次第である

（木田抄）

る。沈没位置には何百といふ艦兵が浮いてゐる。此の時自分は磨山神
の海戦にリユーリックの乗員を救はんが爲め戦機を失したやうな嫌ひが
あつたことを想起し國家が國運を賭して戦つて居るとき敵の乗員を救助
するといふことは以ての外だ、斯ういふときは救助する限りぢやないと
考へ艦兵の數多^も浮いてゐる中^も急遽突破した。その時更に南方に煙煙を見長
時間追かけたが之はノールウエイの^捕艦船であつた。これより先スエトラ
ーナの沈没位置を去るとき亞米利加丸が約三十度附近に居つたので無電
を以てスエトラーナ乗員救助に關し依頼した次第である。ノールウエイ
の捕鯨船から引き返へして來ると新高は敵艦運送が坐破したことの情報
を以て香羽に會同した。それから風生司令官の所在に向つて進航中夏に

(木田納)

南方に一敵艦の北上するを發見し近づくに従ひそれはドンスコイである
 ことが判つた。それで今度はドンスコイと交戦したのであつたが新高艦
 長は「あの艦はドンスコイであることを御承知か」といふ。「承知だ」
 と答へて尙も砲撃を續けたがドンスコイの前部に音羽の十五糎砲弾命中
 した爲め敵艦は浸水して大に困つたと云ふことである。其の外相當の命
 中はあつたが大損害を興へる迄に至らなかつた。其の内漸次暗くなつた
 そうすると敵艦側から見へる閃光は青く光るから赤いのは命中弾の炸裂
 による閃光とを判断した。然し實際は中口径砲と小口径砲の閃光の色が
 違つて見へたらしく従つて随分澤山命中したやうに考へてゐたが左邊で
 もなかつたやうで遂に打止めることが出来なかつたのである。此の間音

羽も大分敵弾を受け戦死者四名、負傷者二十四名を出した。そのとき我
艦逐隊が多数見へたので爾後の攻撃を艦逐隊に譲り瓜生司令官の直接指
揮下に入ったのであつた。實は當時晋羽は大層傾いて居り或は敵弾を受
けてゐるのではないかと心配した。それ故は晋羽に當つた敵弾の頭部が
どうしても行衛が判らない。それで或は前部に穴でもあいてゐるのでは
ないかと考へた。ので士官が石炭庫に入つて調べた所が幸ひ弾頭を發見
した。是なら大丈夫と思つたが艦は傾いてゐるし夜は暗くもあり爾後の
攻撃を艦逐隊に譲つた次第であつた。瓜生司令官は朝晋羽、新高を派遣
してから一向消息がない。勿論晋羽からは無電を以て戦況報告に努めた
が艦旗艦浪速に通過しない。司令官は非常に心配されて搜索に出かけら

れた所が浪速もドンヌコイに出會ひその時ドンヌコイと交戦する音羽、新高を發見され兩艦の無事を知られた次第であつたがドンヌコイから打つた一弾が浪速の水雷室外板を貫通し爲に浪速は浸水して非常な危険に瀕したといふ事件もあつたが音羽の戦況は大體右のやうであつた。

(本田納)